

# Waffen- und Kostümkunde : Zeitschrift der Gesellschaft für Historische Waffen- und Kostümkunde

(ヴァッフエン・ウント・コスチュームクンデ)

München : Deutscher Kunstverlag , 1959—

本誌は1897年ベルリンで創刊した「Zeitschrift für Historische Waffenkunde」という武装史研究の学術雑誌が源である。1921年、これに服装史学 (Historische Kostümkunde) の分野が加わり、1959年本誌は「Waffen- und Kostümkunde (武器学と衣装学)」と称するようになる。市民や上層階級の人々の服装が武装や軍服からの影響を受けていることは西洋服装史に明らかであるから、二つの分野が関連し論じられることは必然といえよう。

したがって本誌は武器学・武装史、服装史の研究者を読者対象としている。構成は2分野にかかわる学術論文、IAMAM (International Association of Museums of Arms and Military History)、ICOM (International Council of Museums) や本誌の基盤団体である Gesellschaft für Historische Waffen- und Kostümkunde等の会議の報告、新刊の書評や、展覧会のカタログおよび関連学術雑誌の掲載論文を集めた文献リストからなる。著名な武器学者や服装史家の逝去にともなう追悼記事が設けられる場合もある。2004年現在、本誌の武器学部門の編集委員はオーストリアのグラーツ州立武器博物館長であるペーター・クレン (Peter Krenn) らが務める。衣装学部門はベルリンの国立文化フォーラム・芸術図書館にあるリッパハイデ衣装文庫長で上記の文献リストを作成するアーデルハイト・ラッシュェ (Adelheid Rasche) とニュルンベルク・ゲルマン国立博物館のテキスタイル・衣服・装身具コレクション部門長のユッタ・ツァンダー=ザイデル (Jutta Zander-Seidel) の2氏である。ラッシュェはリッパハイデ衣装文庫の創設者であるフランツ・リーパーハイデの妻を取り上げた『フリーダ・リッパハイデ：1840—1896：19世紀の染織工芸とモードに捧げた一生 (Frieda Lipperheide : 1840—1896 : ein Leben für Textilkunst und Mode im 19. Jahrhundert)』(1999年刊) の代表作をもつ。一方のザイデルは2002年ゲルマン国立博物館・衣装ホールの展示を新装した。1999年本誌は来たるミレニアムに向けて服飾部門に力を入れるドイツの主要博物館が21世紀への変革と展望を述べた記事を掲載したが、そのなかでザイデルはこの展示を紹介している。同展示のカタログである『衣服の変遷：18世紀から20世紀までの男女と子供の衣服 (Kleiderwechsel : Frauen-, Männer- und Kinderkleidung des 18. bis 20. Jahrhunderts)』はザイデルが手がけた。1988年から2000年までは『レクラムのモード・衣装辞典 (Reclams Mode- und Kostümllexikon)』や『20世紀のモード：現代の文化史 (Mode im 20. Jahrhundert : eine Kulturgeschichte unserer Zeit)』等多数の著書をもつ現代モード史家でプフォルツハイム大学教授のイングリット・ロシェック (Ingrid Loschek) も編集委員の役を務めた。

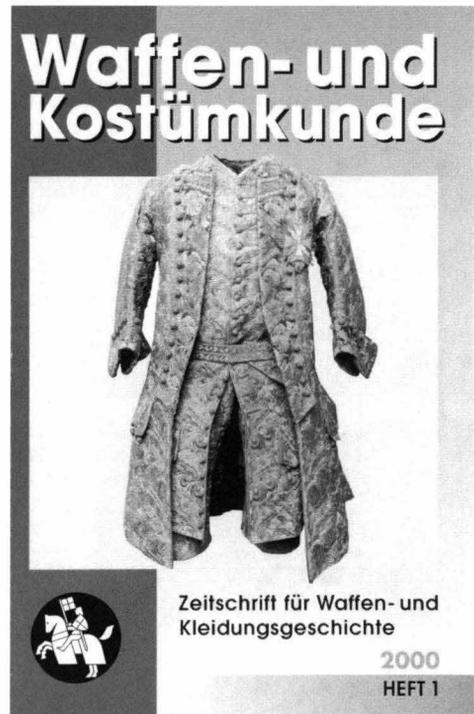
本誌の大半を占める学術論文には、博物館の学芸員が各館の所蔵品や新しい収集品について考証したものが極めて多い。衣装学部門では西洋の博物館に貴重ナルネサンス期の遺品や展示品の焦点となるバロック期からロココ期の服飾に触れた論文が多い。近年では武器の材質や衣服の繊維について科学的に分析したものもみられる。投稿はドイツ、オーストリア、スイスを中心に、イギリス、

フランス、イタリア、スペイン、アメリカ、北欧・東欧圏からと多方面に及んでいる。したがって論文の8割はドイツ語で書かれているが、英語で書かれたものも数多い。またそれ以外の欧州語によるものもわずかながら掲載されている。武器学部門に寄せられた論文は、剣や刀、弩や獵銃・火繩銃・拳銃、大砲に関するもの、武装にかかわるものとしては兜、鎖帷子、胴着、胸板、甲冑を考証したものと幅広い。衣装学部門の論文も石器時代の出土品から現代モードについて考察したものまで多岐に及ぶ。特にベルリン・モードが全盛であった「黄金の1920年代」とその周辺の時代のモード産業やモード雑誌に焦点をあてたもの、また同時期のモードに大きな影響を与えたウィーン工房が制作した衣服の数々を紹介したものなどが注目される。また西洋の武器や衣服に東洋が及ぼした影響について論じたものが多いことも本誌の特徴といえよう。なかにはわが国の服装に触れ、明治時代の洋装化をテーマにしたもの、畑仕事の農婦や江戸時代の木版画に描かれた歌舞伎役者や職人像にみられる「たすき」を実例の一部に身体と衣服の保護について述べたものなどもある。

著名な著作に関連する論文も掲載されている。イギリスの服装史家・故ジャネット・アーノルド (Janet Arnold) の『ファッションのパターン：1560年から1620年頃の男女の衣服の裁断と構成 (Pattern of Fashion: the cut and construction of clothes for men and women, c1560-1620)』にある裁断図の一部は、同氏の「17世紀初期の2着のフェンシング・ダブリット」(1979年2号107-120ページ)、「1585年頃の女子の胴着」(1981年2号132-142ページ)から引用された。クレフェルトのドイツ・テキスタイル博物館のエリザベス・ハクシュパイル=ミコシュ (Elisabeth Hackspeil-Mikosch) の「王の華麗で儀礼的な衣服：アウグスト強王の衣装ケースの2つの礼装」(2000年1号、51-80ページ。図は同稿に掲載されたアウグスト強王が息子フレデリックの結婚式に着用した衣装)は、同氏の博士論文『バロック期の宮廷服と式典：ドレスデンでの1719年の王室と皇室の結婚式：事例研究 (Court dress and ceremony in the age of the Baroque: the royal/imperial wedding of 1719 in Dresden: a case study)』に基づいている。

2000年2号には、旧東ドイツのモードが社会主義国家の近代化を表わす<sup>プロパガンダ</sup>宣伝として利用されていたことを伝える論文も現われた。1989年のベルリンの壁崩壊から10余年が過ぎ、今後は冷戦時代の東側のモードについて明らかにする論文が期待されよう。

(黒川祐子)



2000年1号の表紙